新版（しんぱん）　指導要文集（しどうようもんしゅう）

第三章（だいさんしょう）　宿命転換（しゅくめいてんかん）

臨終（りんじゅう）

彼(か)の伝(でん)を見(み)るに、云(い)わく「今畏(いまい)の遺形(いぎょう)を観(み)るに、漸(ようや)く縮小(しゅくしょう)を加(くわ)え、黒皮隠々(こくひいんいん)として骨(ほね)それ露(あらわ)なり」等云々(とううんぬん)。彼(か)の弟子(でし)等(とう)は死後(しご)に地獄(じごく)の相(そう)の顕(あらわ)れたるをしら(知)ずして徳(とく)をあぐ(挙)などおも(思)えども、かき(書)あらわせ(著)る筆(ふで)は畏(い)が失(とが)をかけ(書)り。死(し)してありければ、身(み)ようや(漸)くつづま(縮)りちいさ(小)く、皮(かわ)はくろ(黒)し、骨(ほね)あらわ(露)なり等云々(とううんぬん)。人死(ひとし)して後色(のちいろ)の黒(くろ)きは地獄(じごく)の業(ごう)と定(さだ)むることは、仏陀(ぶっだ)の金言(きんげん)ぞかし。

（010報恩抄(ほうおんしょう)

臨終(りんじゅう)243ページ－8行）

たとい頸(くび)をば鋸(のこぎり)にて引(ひ)き切(き)り、どう(胴)をばひしぼこ(菱矛)をもってつき(突)、足(あし)にはほだし(絆)を打(う)ってきり(錐)をもってもむ(揉)とも、命(いのち)のかよわん(通)ほどは、南無妙法蓮華経(なんみょうほうれんげきょう)、南無妙法蓮華経(なんみょうほうれんげきょう)と唱(とな)えて、唱(とな)え死(じ)にに死(し)ぬるならば、釈迦(しゃか)・多宝(たほう)・十方(じっぽう)の諸仏(しょぶつ)、霊山会上(りょうぜんえじょう)にして御契約(ごけいやく)なれば、須臾(しゅゆ)のほどに飛(と)び来(きた)って、手(て)をとり肩(かた)に引(ひ)っ懸(か)けて霊山(りょうぜん)へはしり(走)給(たま)わば、二聖(にしょう)・二天(にてん)・十羅刹女(じゅうらせつにょ)は受持(じゅじ)の者(もの)を擁護(おうご)し、諸天善神(しょてんぜんじん)は天蓋(てんがい)を指(さ)し旛(はた)を上(あ)げて我(われ)らを守護(しゅご)して、たしかに寂光(じゃっこう)の宝刹(ほうせつ)へ送(おく)り給(たも)うべきなり。あらうれ(嬉)しや、あらうれしや。

（036 如説修行抄
臨終605ページ3行）

（迫害を受けて）たとえ頸を鋸で引き切られ、胴をひし鉾（槍のような武器）でつきさされ、足には足かせをされたうえ、錐でもまれたとしても、命のあるかぎりは、南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経と題目を唱えに唱えて死んでいくならば、釈迦・多宝・十方の諸仏が、霊山会上で約束されていることなので、瞬間に飛んで来て、手を取り、肩にかけて、霊山にたちまち連れていってくださるのです。薬王菩薩と勇勢菩薩の二聖、持国天王と

毘沙門天王の二天、そして十羅刹女が、御本尊を持ってきた者をかばい護り、諸天善神は天蓋（きぬがさ）を指しだし旗をかかげて私たちを守護して、たしかに常寂光の仏国土に、送りとどけてくださるはずなのです。なんとうれしいことではありませんか。

我が弟子等の中にも信心薄淡き者は、臨終の時、阿鼻獄の相を現ずべし。その時、我を恨むべからず

（041顕立正意抄

臨終640ページ14行）

私の弟子たちのなかでも信心の弱い者は臨終のときに地獄の相になってしまうでしょう。そのときになって私（日蓮）を恨んではなりません。

我(われ)らが滅(めっ)する当体(とうたい)は「化城(けじょう)」なり。この滅(めっ)を滅(めっ)と見(み)れば、「化城(けじょう)」なり。不滅(ふめつ)の滅(めつ)と知見(ちけん)するを、「宝処(ほうしょ)」とは云(い)うなり。

（095 御義口伝(おんぎくでん)　臨終(りんじゅう) 1023ページ17行）

日蓮こそ「念仏者よりも道義房と円智房とは無間地獄の底におつべし」と申したりしが、この人々の御臨終はよく候いけるか

（107 種々御振舞御書
臨終 1245ページ-6行）

人死して後重きは、地獄へ堕つる相なり。

（111光日上人御返事

臨終1265ページ－7行）

なにとなくとも一度の死は一定なり。いろばしあしくて人にわらわれさせ給うなよ。

（171兄弟抄

臨終1475ページ―5行）

南無妙法蓮華経は死出の山にてはつえはしらとなり給え。釈迦仏・多宝仏・上行等の四菩薩は手を取り給うべし。日蓮さきに立ち候わば、御迎えにまいり候こともやあらんずらん。またさきに行かせ給わば、日蓮必ず閻魔法王にも委しく申すべく候。このこと少しもそら事あるべからず。日蓮、法華経の文のごとくならば、通塞の案内者なり。ただ一心に信心おわして霊山を期し給え。

（246 弥源太殿御返事

臨終 1699ページ5行）

黒漆に白物を入れぬれば白色となる。女人の御罪は漆のごとし、南無妙法蓮華経の文字は白物のごとし。人は臨終の時、地獄に堕つる者は黒色となる上、その身重きこと千引きの石のごとし。善人は、たとい七尺八尺の女人なれども、色黒き者なれども、臨終に色変じて白色となる。また軽きこと鵞毛のごとし、軟らかなること兜羅綿のごとし。

（266千日尼御前御返事（雷門鼓御書）
臨終1745ページ14行）

漆におしろいを入れると。白色になります。女性の罪障は漆のようなもので、南無妙法蓮華経の文字はおしろいのようなものです。人は臨終を迎えたとき地獄に堕ちる者は黒色になります。そのうえ、身体が重いことは、綱をかけて千人がかりで引くほどの大きい石のようです。善人はたとえ七尺八尺というからだの大きい女性であっても、色の黒い者であっても、臨終に色が白色に変わります。また身体が軽いことは鵞鳥の毛のようであり、やわらかなことは綿の花のようなものです。

詮ずるところ、臨終只今にありと解って信心を致して南無妙法蓮華経と唱うる人を、「この人は命終して、千仏の手を授け、恐怖せず、悪趣に堕ちざらしめたもうことを為」と説かれて候。悦ばしいかな、一仏二仏にあらず、百仏二百仏にあらず、千仏まで来迎し、手を取り給わんこと、歓喜の感涙押さえ難し。

（276生死一大事血脈抄　臨終1775ページ－3行）

ともあれ、臨終のときは只今であると自覚して信心に励み、

南無妙法蓮華経と唱えている人は、法華経普賢菩薩勧発品第二十八に「寿命が終わってのち、千仏が手を授けて、恐れもなく、苦しみの境界に堕ちることもないようにしてくださるであろう」と説かれているとおりになるのです。喜ばしいことです。一仏や二仏ではなく、百仏や二百仏でもなく、千仏までもが迎えに来てくれて、成仏の境界へと、手をとって導いてくださることを思えば、喜びの涙がとめどなく流れます。

相構えて相構えて、強盛の大信力を致して、南無妙法蓮華経臨終正念と祈念し給え。

（276 生死一大事血脈抄
臨終 1777ページ1行）

心して強盛な信心を貫いて、たえず南無妙法蓮華経・臨終正念と祈っていきなさい。

妻子(さいし)・眷属(けんぞく)の死人(しびと)の前後(ぜんご)にあらそい(争)ゆくは、獄卒(ごくそつ)・阿防羅刹(あぼうらせつ)なり。妻子等(さいしとう)のかなしみ(悲)なく(泣)は獄卒(ごくそつ)のこえ(声)なり。

（297上野殿後家尼御返事(うえのどののごけあまごへんじ)

臨終(りんじゅう)　1834ページ6行）

この人は先世の宿業か、いかなることぞ、臨終に南無妙法蓮華経と唱えさせ給いけることは、一眼のかめの浮き木の穴に入り、天より下すいとの大地のはりの穴に入るがごとし。あらふしぎ、あらふしぎ。

（315上野殿御返事（末法要法の事）

臨終1874ページ3行）

相かまえて相かまえて、自他の生死はしらねども、御臨終のきざみ、生死の中間に、日蓮かならずむかいにまいり候べし。

（324上野殿御返事（刀杖難の事）
臨終1892ページ-2行）

よくよく心して、自分についても他のひとについても生死はわからないでしょうけれども、御臨終のさいに、また生死の中間には、日蓮がかならず迎えに行ってあげましょう。

ただいまに霊山にまいらせ給いなば、日いでて十方をみるがごとくうれしく、「とくしにぬるものかな」と、うちよろこび給い候わんずらん。中有の道にいかなることもいできたり候わば、「日蓮がでしなり」となのらせ給え。

（361 妙心尼御前御返事（病之良薬の事）臨終 1963ページ16行）

退転なく修行して最後臨終の時を待って御覧ぜよ。妙覚の山に走り登って四方をきっと見るならば、あら面白や、法界寂光土にして、瑠璃をもって地とし、金の縄をもって八つの道を界えり。天より四種の花ふり、虚空に音楽聞こえて、諸の仏菩薩は常楽我浄の風にそよめき、娯楽・快楽し給うぞや。我らもその数に列なりて遊戯し楽しむべきこと、はや近づけり。信心弱くしては、かかるめでたき所に行くべからず、行くべからず。

（374 松野殿御返事（十四誹謗の事）

臨終（1994ページ7行）

退転することなく信心の修行をして、最後の臨終のときを待ってごらんなさい。妙覚の山に走り登って、四方をみわたせば、なんとすばらしいことでしょうか。あらゆる世界はすべて寂光土で、瑠璃をもって大地とし、金の縄で涅槃にいたる八つの道のさかいをつくり、天からは曼荼羅華などの四種類の花が降ってきて、空には音楽が聞こえ、もろもろの仏や菩薩は常楽我浄（仏の境地や大乗の悟りにそなわる四つの徳のこと）の風にそよめき、心から楽しんでおられるのですよ、私たちもそのなかに加わって、遊び楽

しんでいけるのは、もう間近(まぢか)です。信心(しんじん)が弱(よわ)くてはこのようなすばらしい所(ところ)へけっして行(い)くことができないのです。

我より後に来り給わん人々は、この車にめされて霊山へ御出であるべく候。日蓮も同じ車に乗って御迎えにまかり向かうべく候。

（395 大白牛車御消息

臨終 2050ページ15行）

御消息に云わく「みょうほうれんげきょうを、よるひるとなえまいらせ、すでにちかくなりて、二声こうしようにとなえ、乃至いきて候いし時よりも、なおいろもしろく、かたちもそんぜず」

（408 妙法尼御前御返事（臨終一大事の事）
臨終 2101ページ6行）

法華経（ほけきょう）に云（い）わく「如是相乃至本末究竟等（にょぜそうないしほんまつくきょうとう）」云々（うんぬん）。大論（だいろん）に云（い）わく「臨終（りんじゅう）の時（とき）に色黒（いろくろ）きは、地獄（じごく）に堕（お）つ」等云々（とううんぬん）。

（408 妙法尼御前御返事（みょうほうあまごぜんごへんじ）（臨終一大事（りんじゅういちだいじ）の事（こと））

臨終（りんじゅう） 2101ページ－8行）

されば、まず臨終のことを習って後に他事を習うべし
（408妙法尼御前御返事（臨終一大事の事）
臨終2101ページ-13行）

ゆえに初めに臨終ということについて学んでから、その後でその他の事柄について学んでいくべきです。